

⑩ 渋沢家より作品寄贈

昭和八年一月、渋沢敬三より橋本雅邦および瀧和亭筆の襖が本校へ寄贈された。寄贈書には次のように記されている。

記

一 橋本雅邦筆襖貳枚縁及引手付

紙本墨畫四季山水圖、内四枚ハ表裏両面ニ描ケリ、明治三十三年頃ノ作

一 同筆明り障子腰貼八枚縁及引手ナシ

右ニ連續セルモノナリ、同時ノ作

一 瀧和亭筆襖拾貳枚縁及引手付

紙本着色巖波千鳥圖、内四枚ハ表裏両面ニ描ケリ、又二枚ハ板戸貼ナリ、明治三十三年頃ノ作

右祖父榮一起居致居候飛鳥山ノ弊邸ニテ用キ居候モノニ有之今般御校へ寄贈仕度候間可然御取計被下度候也

昭和八年一月二十日

子爵澁澤敬三〔印〕

東京美術學校長和田英作殿

このうち雅邦筆の襖と障子腰貼は昭和十年竣工の正木記念館の二階和室に取り付けられた。

⑪ ラグーザの遺作および清原玉の作品の寄贈

昭和八年十一月、ヴィンツェンツォ・ラグーザ (Vincenzo Ra-



清原玉筆 春 明治33年

gusa 1841-1928) の遺作十六点がその郷里パレルモ市に住むエレオノラ・ラグーザ夫人(清原玉)から本校に寄贈され、併せて夫人の油画四点も寄贈された。『校友会会報』第三号所載「文庫彙報」には次のような作品が記されている。「」は『東京芸術大学芸術資料館藏品目録 彫刻Ⅱ』所載作品名である。

ラグーザ作品

ガリバルヂ騎馬像

清原玉像

娘

黒田長溥像

天国に向ひて

露国某伯爵夫人〔ケレル女像〕

日本の俳優(九代目團十郎)

日本婦人

小児のバツカス

正義(ライオン)

日本人

日本の大工

祈り

パレルモの女

以上石膏各一点

大理石一点

人像柱（未完成作）

大理石二点

清原玉作品

思い出〔風景〕

春

五月の薔薇

ラグーザ肖像

以上油画各一点

寄贈のいきさつを新聞は次のように報じた。

彫刻の巨匠ラグーザ氏の遺作 日本へ近く寄贈

国際情話の主人公お玉未亡人から

ラグーザお玉——明治初年に評判された伊太利彫刻の大家ラグーザ氏未亡人お玉さんからラグーザ氏の遺作寄附の申出でが到着した。

お玉さんは明治九年時の工部卿故伊藤博文公が我國工藝美術の發達をはかる爲め工部美術學校を創設した際、彫刻の教師として招聘されたラグーザ氏に愛され同十六年氏の歸國とゞもに連れて行かれ、異郷の地シシリイ嶋パレルモ市に半世を過ごして來たが、可憐なニツボンムスメだつたお玉さんも今は六十を越したお婆さんとなり、ひたすら望郷の念にかられてゐるが、せめてもの心遣りと亡夫の遺作や所藏の繪畫彫刻等數十點を我國に寄附したいと當時師事した府下落合町上落合六〇七堀通各氏及清原繁次郎氏の許に傳へて來た

女史の意をくんだ兩氏は逗子に住む我國洋畫界の泰斗松岡壽氏に通じて來たので上野美術學校に飾るべく斡旋することゝなつた。お玉さんも遺作寄附とゞもに歸國したい意を洩らして居り、

國際的情話の主人公を見るのも近いであらうといはれてゐる

右に就いて松岡壽氏は語る「お玉さんは最近頻りと日本に歸りたがつてゐるさうですから所藏品寄附も或は歸國の前提でせう、ラグーザ氏は洋畫の大家ホンタネジイ建築のカベレツチ氏等とゞもに工部美術學校に招かれた彫刻の世界的巨匠で、何れにしても氏の遺作品が寄附されるといふことは斯界の爲め大いに得る所があらうと期待してゐます」

（昭和七年一月二十八日『時事新報』）